

事例から学ぶ事故検証の意義と課題

戸 田 芳 雄

日本安全教育学会理事長
明海大学客員教授
学校安全教育研究所顧問

参考資料

平成29年3月27日那須雪崩事故検証委員会報告書
(概要版)

http://210.164.7.60/m01/documents/20171015_houk-okusyogaiyouban.pdf

事例

- 日時 平成29(2017)年3月27日
- 状況 高校生の**安全**登山研修会中に
雪崩に遭遇
(降雪・積雪のため、計画を変更)
- 結果 8名死亡 (高校生7名、教員1名)
40名が負傷

1 平成29年3月27日那須雪崩事故検証委員会の設置目的

設置目的: 平成29年3月27日、栃木県高等学校体育連盟主催の春山安全登山講習会中に発生した雪崩事故について、事故の状況、課題等の検証を行うとともに、事故の再発防止に資するため、第三者の有識者による雪崩事故に関する検証委員会を設置

所掌事務: 雪崩事故の原因等の調査及び検証及び再発防止に向けた提言

委員構成: 委員会は「委員」及び「協力委員」から組織

① 委員(定数10人以内)

本件事故に関して第三者の有識者から委嘱

② 協力委員(定数5人以内)

本件事故に関して委員の求めに応じて、委員が行う調査等に協力

【委員】

No.	所属・職名等	氏名	ふりがな	備考
1	弁護士（四谷番町法律事務所）	岸 郁子	きし いくこ	学識経験者
2	弁護士（元札幌高等裁判所長官）	田中 康郎	たなか やすろう	学識経験者
3	東京女子体育大学 教授	◎ 戸田 芳雄	とだ よしお	学識経験者
4	名古屋大学大学院 教授	○ 西村 浩一	にしむら こういち	学識経験者
5	国立登山研修所専門調査委員 （富山県立山カルデラ砂防博物館 学芸課長）	飯田 肇	いいだ はじめ	登山関係者
6	国立登山研修所専門調査委員 （長野県大町岳陽高等学校 教諭）	大西 浩	おおにし ひろし	登山関係者
7	国立登山研修所専門調査委員 （名古屋工業大学 教授）	北村 憲彦	きたむら かずひこ	登山関係者
8	那須赤十字病院救命救急センター 副センター長	林 堅二	はやし けんじ	医療関係者
9	日光市消防本部 副主幹	菊地 雅人	きくち まさと	消防関係者
10	宇都宮地方気象台 観測予報管理官	小島 恒之	こじま つねゆき	気象関係者

【協力委員】

1	日光市山岳遭難防止対策協議会 会長	大久保 勝	おおくぼ まさる	地元山岳関係者
2	栃木県山岳連盟 会長	喜内 敏夫	きない としお	地元山岳関係者
3	那須山岳遭難防止対策協議会	高根沢 修二	たかねざわ しゅうじ	地元山岳関係者
4	栃木県高等学校PTA連合会 副会長	江田 義久	えだ よしひさ	PTA関係者

2 委員会の基本方針

○ 責任追及は目的としない。

当委員会は、関係者の民事・刑事等に関わる責任追及を目的とするものではなく公正・中立な立場から本件事故に関わる事実を調査・検証し、学校の管理運営の観点から事故の原因や問題点を明らかにした上で、安全管理等の改善策を検討し、類似の事故の再発防止に資することを目的とし調査・検証を進める。

○ 関係者の疑問に答え、納得できる調査・検証を目指す。

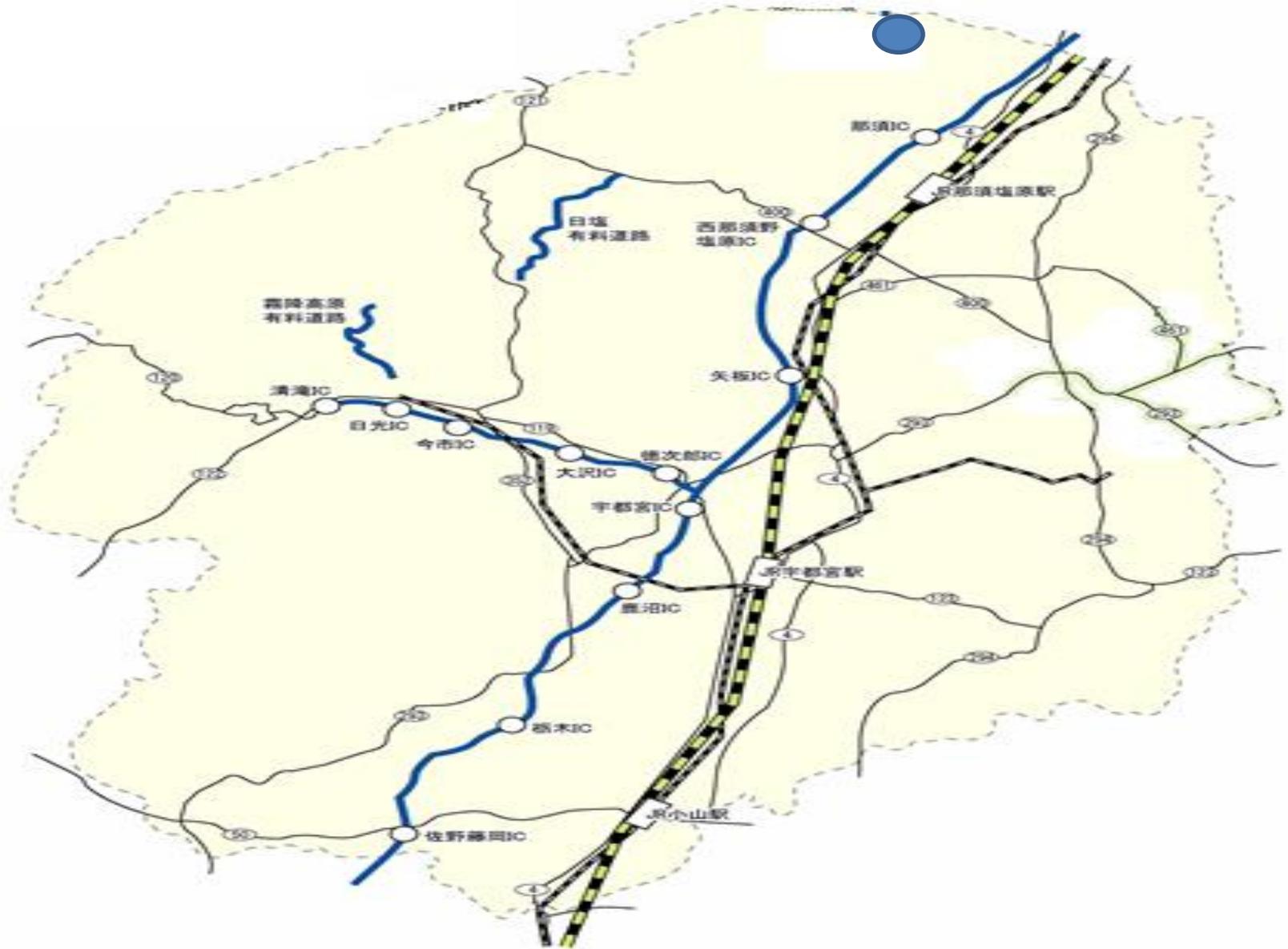
当委員会は、直接的な事故の状況に限ることなく、可能な限り組織的、社会的な部分をも含めて背景事情を明らかにすることを目指す。

○ 認定に係る事実の确实性の程度に即して表現を統一する。

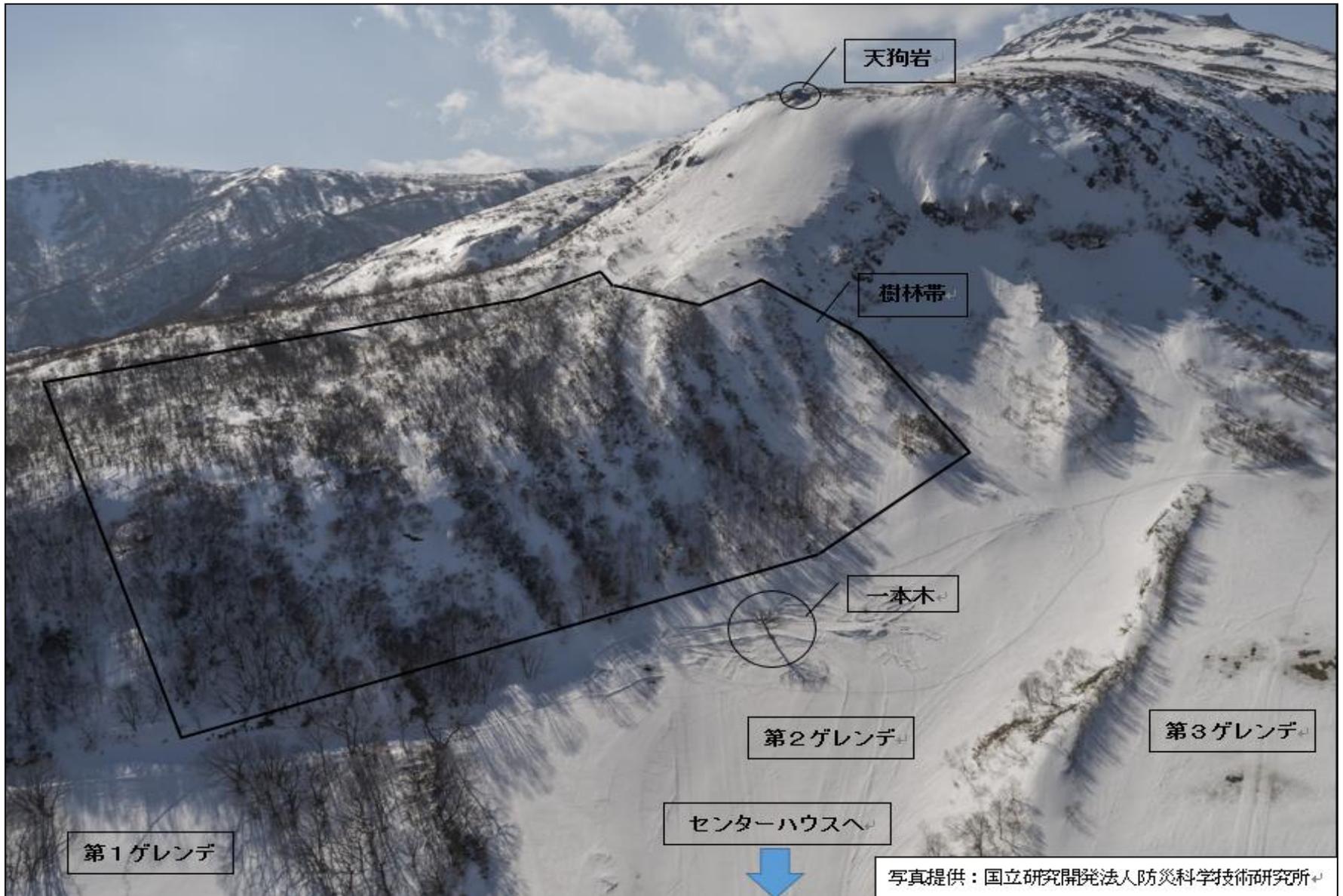
調査においては、提供された資料や関係者からの聞き取りの結果から、過去の事実を認定し、これを分析評価の対象とする。

この認定した事実がどの程度确实なものかは一様ではないため、事実の認定に係る确实性の程度に即し、次表により文末の表現を統一している。

事実認定に係る確実性の程度	用いた表現
動かしがたい事実として認定できる場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・である。 ・・・している。
高度の確実性があるって、間違いない事実と認められる場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・と推定(推認)される。
可能性が高い事実と認められる場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・と考えられる。
可能性がある事実の場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・の可能性がある。
可能性が否定できない事実の場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・の可能性が否定できない。
明らかにできなかった場合	<ul style="list-style-type: none"> ・・・を明らかにすることはできなかった。



事故の現場





1班		
	時刻	行動
①	8:00頃	樹林帯に入った。
②	8:20頃	尾根に出て、樹林帯の斜面で休憩
③	8:30頃	樹林帯を抜け、雪面に出たところでいったん止まるように指示
④	8:35頃	小さな木が数本生えているところで止まるよう指示
⑤	8:40頃	やや急な斜面になる手前で止まるように指示 岩の近くに行って帰ることにした。
⑥	8:43頃	雪崩に巻き込まれた。

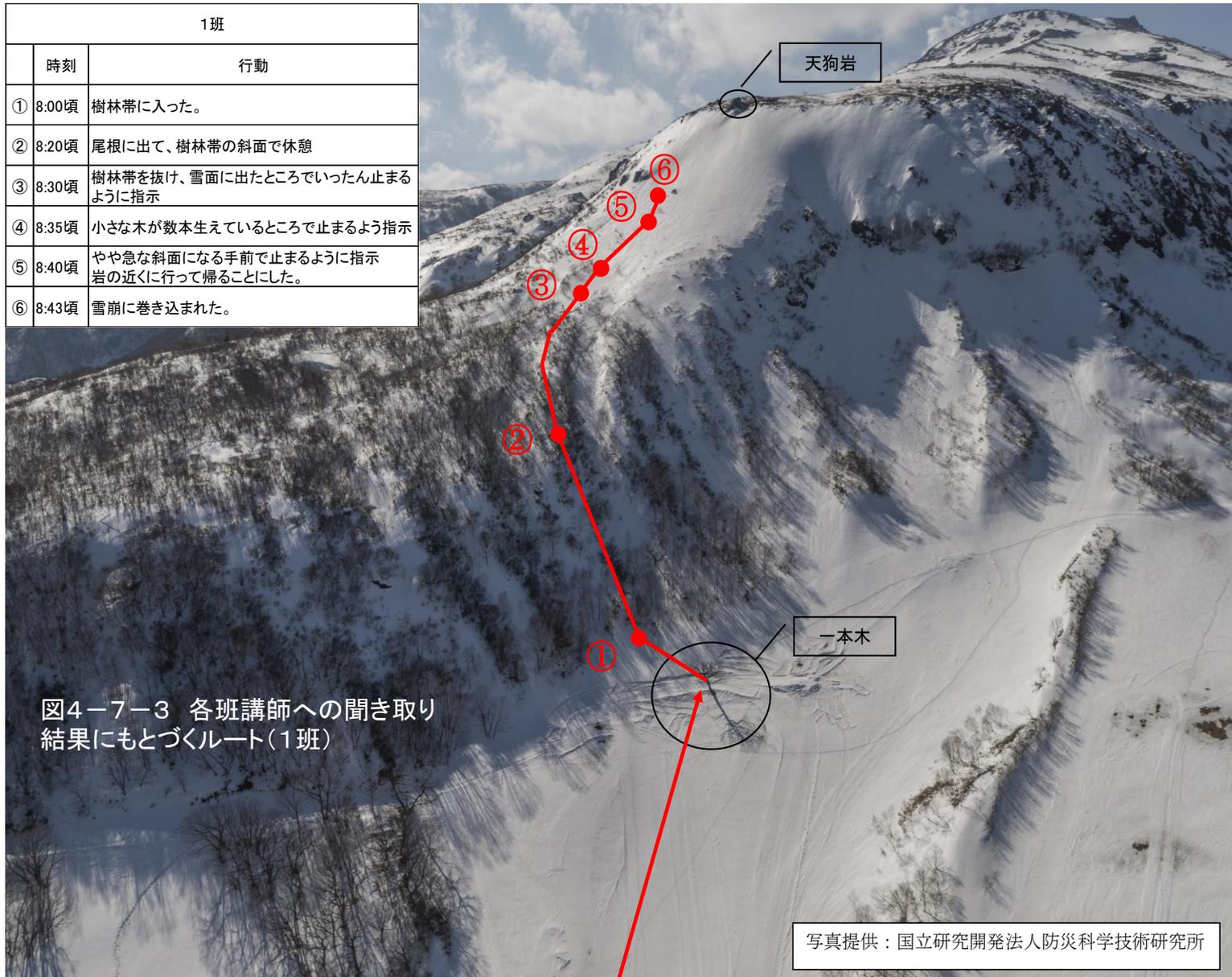


図4-7-3 各班講師への聞き取り結果にもとづくルート(1班)

写真提供：国立研究開発法人防災科学技術研究所

主な問題点等

1 高体連、同登山専門部、春山安全登山講習会等の体制、運営等の状況

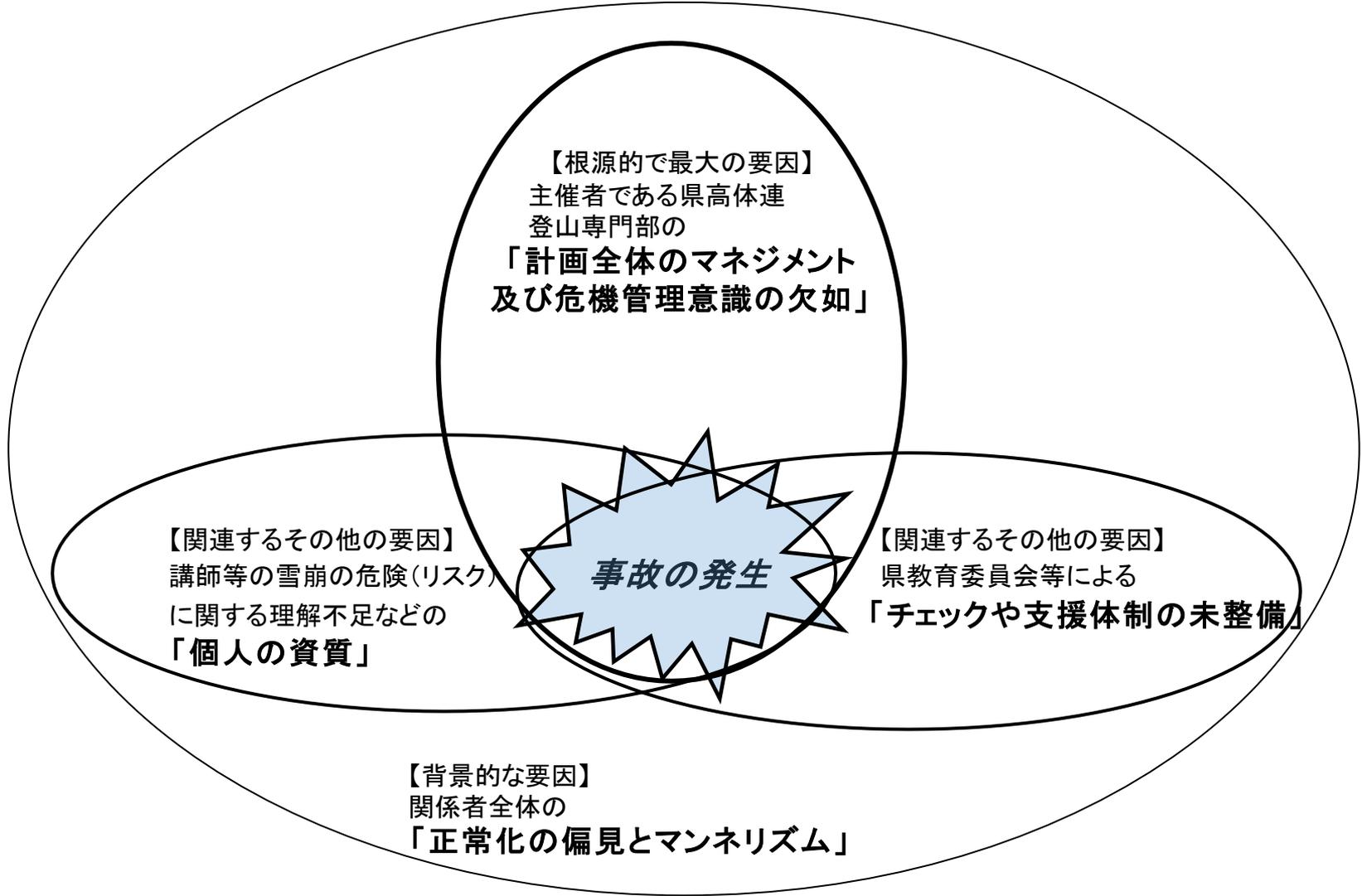
- ・ 伝統的行事であることから生じる慣れにより、講習会の計画について安全確保の観点から検討が不十分。
- ・ 本件講習会は、登山計画審査会の審査対象とされておらず、県教育委員会によるチェック機能が欠落。
- ・ 班構成における生徒と講師の所属が一致しておらず、講師が生徒に対し統率力を発揮できる体制が構築されず。
- ・ 講習会全体における責任体制が整備されておらず、計画変更の際の意思決定方法や決定事項の伝達方法が不明確。
- ・ 講習会終了後に事故事例やヒヤリハット事例を集積、共有しておらず、十分な反省や改善策の検討・引継が未実施。
- ・ 講師の具体的な選定基準が設けられておらず、決定方法も曖昧。

論点に基づいた分析等(内容略)

- 1 登山部活動及び講習会等の安全管理体制の整備と指導者の資質向上
- 2 登山等における気象遭難事故防止のための危機管理(リスクマネジメント)
- 3 気象遭難等の登山事故防止のための連絡体制
- 4 学校登山事故と安全配慮への措置の在り方

まとめ

<事故発生の要因>



教訓と考えられること

思い出したことわざ

「転石、苔を生ぜず」

大切にすべき事柄

主体性を持った協働

危険予測と危機回避

情報の共有とコミュニケーション

7つの提言

- 1 PDCAサイクルに基づいた計画のマネジメントと危機管理の充実
- 2 安全確保のための県教育委員会のチェック機能の充実
- 3 総合的な安全への対応力の向上を目指した顧問等の研修の充実
- 4 高校生の安全な登山活動を支え、推進するための国、関係機関等の支援
- 5 高体連の主体性の確立と部活動指導者の育成、確保
- 6 全ての関係者の心のケアの推進
- 7 生徒の学ぶ意欲を喚起し、事故の教訓の風化を防ぐための取組

検証を実施しての課題と対応

- ① ご遺族等の思いや要望に、即座に応えるのは難しい。
ご遺族・・・事実のすべてを速やかに明らかにし、知らせてほしい。
実際には、当初はほとんど提供できる内容が入手できない。
(対応) 調査結果だけでなくプロセスを含めて、できるだけ多くの説明の機会を持つ。
- ② 個々に多様な要望や思いがあり、ご遺族等に寄り添うことは、容易ではない。
(対応) 委員会は原則公開とし、ご遺族等に調査の進捗状況も含めて直接感じてもらった。また、個別の面談も行った。
- ③ 教員を罰してほしいという声大きい。
(対応) 当初から委員会の役割を明示し、繰り返し、説明した。
- ④ 情報の収集が難しく、警察の情報は得られない。
(対応) 実地調査や関係者の聞き取り、公的研究機関や救急業務に関わった組織等に情報を求め、多様な情報から検討を進めた。

検証を終えての感想と指針の運用について

- ① 詳細検証には、膨大な時間と労力が必要となり、教員にも負担が大きい。
- ② 死亡事故・重大事故の報告義務と詳細調査の実施対象を、一般にも分かりやすく、限定的に表現する必要がある。
- ③ 教員を罰してほしいという声に対して、検証の意義と役割を指針の中でより明確にし、周知・徹底する必要がある。
- ④ 指針の中で、普段の事故防止について、設置者、校長等の主体的な役割意識を醸成する具体の方策を示す必要がある。
- ⑤ 研修や啓発等を通じて、指針の内容の周知を図り、教員等が教育活動において事故防止と事後措置等リスクマネジメントを行うことの重要性をより明確に示す必要がある。

私の結論。事件・事故災害は**未然防止が最も重要**！

死亡や障害が遺るような事故が発生すると、本人の人生に重大な影響があり、社会的にも重大な損失を与える。家族、仲間や友達、教職員等のみんなが大変な心労と事後対応などに追われて通常の教育活動が停滞する。

また、地域の方々などにも深刻なダメージが遺ったり、学校への不信感が増大したりする。日頃から、しっかりしたリスクマネジメントをして事故の未然防止に努め、楽しく充実した教育活動が実施できるようにしたい。

そのためには正常化の偏見(正常性のバイアス)と形骸化(マンネリズム)が最大の壁となる。いつもやっていた、きっと大丈夫はNGとし、指針に沿って「チーム学校」で協働して普段の事故防止に努めることが重要である。